

学術会議での経験から：広報活動は十分だろうか？

谷口 直之

第20期と第21期の学術会議会員として多くの貴重な経験をさせていただいた。私の研究領域とは異なる委員の方々の高い見識に学ぶことも多かったので、会議には海外出張がない限りはできるだけ出席した。一方で、一般の方々の多くが大学や研究所などの中枢におられて多忙な方々が多く、出席率は必ずしも高くなかったため、基礎医学委員長を拝命したときも委員会の日程調整や定数確保に困難を極めたことを記憶している。また、議論のテーマに類似のものを掲げた委員会が多く、重複を避けるために報告書などをまとめるには苦労があった。また委員会で議論をして報告書を出しても、研究者コミュニティの方々がどの程度その報告書を読んでもくれるのかという心配も付きまとった。

さて、第二部では主に基礎医学委員長として2-3のお手伝いすることができた。

一つは生命科学系の提言のまとめに微力ながら協力できたことである。中でもシステム生物学の重要性を論議して報告書にまとめたことは印象に残った。

もうひとつは“生命系における博士研究員（ポスドク）ならびに任期制助教および任期制助手などの現状と課題”のアンケートを行い集計し提言としてまとめたことである（日本学術会議提言2011.9-29公表参照）

アンケートをするのにも資金がなく、学会からの支援もなかなか得られなかった。それまでは学会と学術会議との関係といえば、所属会員が科学研究費の審査委員の推薦が関心を持っていた点であるが、それが学術振興会で選出することになり、また学術会議会員の選出も学会とはほとんど無関係になり、学会とのつながりが少し疎遠になったこともその理由の一つだった。幸い当時浅島誠先生が会長をつとめておられた日本生物科学会連合にお願いして一部御援助を頂き、さらに金澤一郎会長や山本正幸会員の御助言がありアンケートをすることができた。また、Medecal Tribune誌調査部に廉価での統計処理などのお手伝いをお願いした。作業はほとんどが我々の研究グループに事務局がある日本糖鎖科学コンソーシアム（JCGG）と理化学研究所の有志のかたにボランティアをお願いした。提言も科学技術白書にも内容の一部が掲載され、さらにこの結果をメディアなどで引用してくださった方がおられ、少しはお役に立てられたと満足をしている。ただ依然として我が国のポスドクの問題は解決には程遠いのは残念である。

話は変わるが、日本学術会議の広報活動について一言述べたい。2年前全米科学アカデミー（NAS）が Transforming Glycoscience; a roadmap for the future という報告書を出した。ご存知の通り、NASは科学・技術に関して米国の連邦政府へ助言する権限をもっている。この報告の作成には10名の委員、5名のスタッフのほかおよそ90名の世界各国の研究者が参画しており、かなり内容も国際的なレベルで大変充実した内容である。私自身も30分ほどの電話でのInterviewを受けて、我が国、アジアなどの現状を伝えた。その内容の重要性から、“変貌するグライコサイエンス:未来へのロードマップ”という題名で日本語に理研の方たちや、藤川良子氏（メディカルサイエンスインタナショナル社）が翻訳に協力し、無料で配布した。専門家以外の方にも広く読んでいただきたかったからである。NASはNational Academies Pressから2週間に一つぐらいの頻度でこのような報告書が印刷されているようである。それだけでなく、その情報はインターネットで常に配信

されていて、私の専門以外の報告でもかならず連絡がくる。

日本学術会議もかなり頻繁に有益な提言、報告などを発信はしているが、まだ広報活動という点ではかなり NAS には見劣りがするように思う。日本学術会議の使命も本来はこのような報告書を各分野で作成し、“学術の動向”などの出版のみならず、各学会のメールアドレスを利用して、関連の提言や報告書をもっと頻繁に送付することも必要に思う。折角の日本学術協力財団の学術会議叢書シリーズも一般の読者にはあまり目に触れないように思われる。これらの編集に当たられている会員の方々のご努力には敬意を表すが、“学術の動向”が学術会議の連携会員にもやっと配布されるようになったのもごく最近のことで予算削減のご時世だけに、学術会議の費用では制約があることも十分理解できる。しかし宣伝活動をもう少し何等かの方法で活発にする工夫ができないだろうか？

いずれにせよ、2 期にわたって、会員としていろいろな経験をさせていただいたことに心から感謝申し上げたい。

●プロフィール

谷口 直之

日本学術会議第 20・21 期第二部会員

大阪大学医学系研究科教授

大阪大学教授名誉教授

日本学術会議第 22・23 期連携会員

国立研究開発法人理化学研究所グループディレクター